

2023 年 3 月 11 日 Ver.b

乗木養一

2 年 A 漢字

親の字誌

P.2	精 選 案	一貫して A 漢字あつかい。
P.4	漢 字 表	当用漢字・教育漢字に採用。
P.5	配当学年	当初 3 年配当だったが、1968 年改訂で備考漢字となり、1977 年以降 2 年配当となり今日にいたる。
P.6	基本漢字表	カナモジカイ 500 字案、生活基本漢字（履歴書）などに採用。
P.8	出現頻度	凸版（3）順位が 172 位。新聞が 300 位台。
P.11	習得状況	「読み」とくらべて「書き」が、かなりむずかしい。 1 年後の 3 年生はじめの成績。 「親友」の読み 80 % 台、書き 30 %。 「父親」読み 90 % 台、書き 60 % 台。 「親しい」読み 10 % 台、書き 10 % 台。 「親しむ」読み 10 % 台、書き 6 %。
P.16	音 訓	4 つの音訓とも小学校段階に割り振られる。
P.18	字体と字形	同音の「新」の構成要素「亲」と共通する点を重視したい。
P.22	字体の変転	当初は「辛+見」だったが、やがて「亲+見」になって、いまにいたる。「新」は「木」と関連あるが、「親」は無関係とみるのが有力。「亲+見」となったのは、意味からではなく、「新」になれしたしんだ習慣によるもののようだ。
P.25	字 源 説	字源そのものが不明である。 現行の学習漢字辞典の字源説は、どれも説得力がない。
P.33	初期の用例	名詞「 おや 」や副詞「 みづから （したしく）」が初期にみられる。
P.41	字 義 意味の変転	原義不明。全体をつらぬく基本的な意味は、《 あいたが近い 》だが《 おや 》と《 したい 》のどちらが先行するかは不明である。
	語 イ	① 和語の「おや」を中心に日常語がたくさんうみだされる。「親子」「母親」「親ネコ」「親ゆび」など。 ② 「見言研教育基本語イ」に選定された語がない。見城慶和「批判読み教育基本語イ」には、「仲間意識を育てるもの」として「親切」（小 4）、「親しい」（小 5）をあげる。 ③ 小学校 2 年生の段階で「親しい」「親しむ」の語はなじみが少ないだろうが、「親しい友＝親友」や、「～に親しむ」などの語句を、体験を通して理解できるようにする 「語イ表」参照 ことが考えられる。

1. 国字研精選案における位置づけ

使用頻度・漢字語形成力・必要性

「親子」「親友」「親切」「親しい」のような日常よくふれる漢字語や語句を構成することから、小学生のうちから、こどもたちが使う機会が多いとみられます。学習や日常生活のうえで必要性が高い漢字といえます。小学校で読み書き両方のちからを定着させる「A 漢字」に位置づけています。

国字研精選案におけるあつかいのうつりかわり

	1978年8月 大久保忠利第1次私案 「B基本漢字」に選定	小学校600字	○
	1978年12月 見城慶和・関可明修正案	小学校758字	○
	1984年4月 小学校第1次素案	小学校600字	○
	1987年8月 小学校第2次素案	小学校600字	○
旧精選案	1988年8月 国字研小学校第3次素案 「○小学校で書けるようにする漢字」	○漢字614字	○
	2009年8月 2009年改定精選案 「A 漢字：読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる」に分類	A 漢字608字	A
	2010年5月 2010年補正精選案	A 漢字608字	A
現行精選案	2017年3月 2017年学習指導要領改訂に対応の精選案	A 漢字608字	A

大久保忠利第1次私案（1978年）

国字研の「教育漢字精選案」では、当初の1978年8月に大久保忠利が発表した「第1次私案」（600字精選案）で、「A 特別漢字」（100字）、「B 基本漢字」（500字）のうち「B 基本漢字」に「親」をとりいれています。

大久保は、精選にあたり、つぎの3つの手順をふみました。

第1手順は、①「国立国語研究所7年間連続調査」（1952年－1959年）で「読み・書き」とともに50％台以上可能だった字をえらぶことにしました。①「親」は50％台以上可能だった487字にふくまれており、ここで選んでいます。

第2手順は、①の調査で「読み・書き」とともに50％台以上にならなかった漢字394字を対象に、②「文化庁調査」と、③「清滝小学校調査」でもかさなって成績がわるかった字をとりだし「難学習漢字」としました。ここでかさなかった字194字をえらんでいます。

（②③の調査で「親」についての調査結果はP.12～13参照。）

第3手順は、候補にした第1手順 487 字と、第2手順 194 字の合わせて 681 字のなかから 81 字をのぞくことにしました。

さらに「最終くふう」をくわえ、いくつかの調整をへて「A 特別漢字 (100 字)」「B 基本漢字 (500 字)」案を決定しました。小学校での生活空間内の必要度を尺度にしたといいます。

ここで「B 基本漢字 (500 字)」に「親」を正式にとりいれることにしました。

【旧精選案】小学校第3次素案 (1988 年)

1988 年 8 月に国字研「第3次素案」は、「親」を「小学校で書けるようにする漢字」(A 漢字)に位置づけました。

I セット5過程方式による『漢字プリント』(小学校 5 年, 日本教育出版サービス, 1994 年)や、『たのしく みにつく 漢字の力』(小学校 5 年, ルック, 2006 年)は、「A 漢字」のあつかいで編集しました。

【現行精選案】改定小学校学習漢字精選案 (2009 年改定・2010 年, 2017 年補正)

それから 20 年後の 2009 年に国字研は、「第3次素案」を改定した「2009 年改定 (2010 年補正) 教育漢字精選案」(現・小学校学習漢字精選案)を公表しました。ここで「親」を小学校で読み書き両方のちからを定着させる「A 漢字」に選定しました。

第二学年	引羽雲園遠何科夏家歌画回会海絵外角楽活間	
	丸岩顔汽記帰弓牛魚京強教近兄形計元言原戸	
	▲ x x ▲	
	古午後語工公広交光考行高黄合谷国黒今才細	
	▲ ▲ ▲	
	作算止市矢姉思紙寺自時室社弱首秋週春書少	
	▲ ▲ ▲	
	場色食心新親図数西声星晴切雪船線前組走多	
	▲ ▲ ▲	
	太体台地池知茶昼長鳥朝直通弟店点電刀冬当	
	▲ ▲ ▲	
	東答頭同道読内南肉馬売買麦半番父風分聞米	
	▲ ▲ ▲	
	歩母方北毎妹万明鳴毛門夜野友用曜来里理話	
	x x	
		A 無印 146 字 B ▲ 10 字 C x 4 字 計 160 字

精選の観点に「使用頻度, 機能性 (漢字語形成力), 必要性 (学習や日常生活に必要であるか) が高いか」, 学校教育において「適切な時間配分で指導できる漢字数か」(読みとり, 作文, 文法などの指導時間が確保できるか)をたてて, 実際の漢字指導に生かすことができる「精選案」をめざしました。

2. 漢字表

当用漢字・教育漢字に採用されました。

(1) 当用漢字表 (1946 年 11 月 16 日, 1850 字)

右図→

(2) 当用漢字別表

(「教育漢字」1948 年 2 月 16 日, 881 字) 下図↓

見部	見規視親覺(覺)觀(觀)
----	--------------

(3) 当用漢字音訓表 (1948 年 2 月 16 日) 下図↓

見部	親	シン おや・したい
----	---	--------------

(4) 当用漢字字体表 (1949 年 4 月 28 日)

右図→

親

見部
見規視親覺(覺)觀(觀)

(5) 当用漢字改定音訓表 (1973 年 6 月 18 日)

訓「したい」(形容詞)の派生形「したしむ」(自動詞)を追加。「したしむ」は、形容詞「したい」の語幹をもとになりたっており、「追加の必要があるかどうか、うたがわしい」と批判があつまりました。これが「常用漢字表」につながりました。その結果、学校教育における訓の指導内容がふえたことになります。

(6) 常用漢字表 (1981 年 10 月 1 日) ↓

親	シン おや したい したしむ	親族, 親友, 肉親 親, 親子, 父親 親しい, 親しさ 親しむ
---	-------------------------	--

2010 年改定で変更なし。

3. 小学校学習指導要領の学年配当

当初は 3 年配当でした。1968 年の改訂で読みを 2 年に、1977 年の改訂で読み・書きともに 2 年に配当されました。なぜ、この字を 1 学年下にしたのかの説明はありませんでした。政治の要求をもとに小学校 6 年間で学ぶ漢字を 115 字追加したことから、教育的な配慮ぬきに、たまつきでおろされたとみられます。現行の 2 年配当が適切かどうか検討を要します。

配当学年の推移

告示	実施・使用開始	学習指導要領・教科書		教育漢字数
	1947 年 4 月	学習指導要領(試案)	[注1] 2年	684
	1951 年 4 月	小学校学習指導要領(試案)	[注2] あり	881
	1952 年 9 月	学習漢字学年別配当試案	[注3] 3年	881
1958 年	1961 年 4 月	小学校学習指導要領	3年	881
1968 年	1971 年 4 月	小学校学習指導要領	[注4] *3年	996
1977 年	1980 年 4 月	小学校学習指導要領	2年	996
1989 年	1992 年 4 月	小学校学習指導要領	2年	1006
1998 年	2002 年 4 月	小学校学習指導要領	2年	1006
2008 年	2011 年 4 月	小学校学習指導要領	2年	1006
2017 年	2020 年 4 月	小学校学習指導要領	2年	1026

[注1] 1947 年『文部省著作国語教科書』第 6 期国定読本（いいこ読本）の提出学年と教育漢字数である。

[注2] 「881 字」は、義務教育期間中の指導字数である。「親」もふくまれていた。

[注3] 文部省が学年別漢字配当を決定するにあたり、1952 年 3 月に「漢字学習指導研究会」をつくり、そこで 3 次にわたる「配当試案」を作成した。掲出の学年は「第 3 次案（最終試案）」のものである。とりまとめた日どりは、明確につたえられていないが、1952 年 9 月には、東京都内 12 校に実験指導を依頼しており、それまでには、まとめられていたとみられる。

[注4] 「*」をつけた漢字は「すぐ下の学年で読めるようにしておく」とされた。つぎの改訂から読み書きともに下の学年に移行された。

音訓の学校段階別わりふり（2017 年 3 月 31 日 文部科学省）

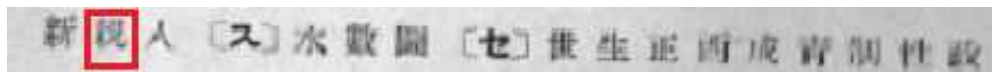
シン・おや・したい・したしむ（小学校）

小学校段階にわりふられる 4 音訓ともに、現状では小学校 2 年段階で指導することが想定されています。

4. 基本漢字表

「夜間中学生のための生活基本漢字」381字に選定されるなど、社会生活における基本的な漢字だと位置づけられています。

1. カナモジカイ500字案 1936 年



(オカザキ ツネタロウ・岡崎常太郎『漢字制限の基本的研究』，松邑三松堂，1938 年)

カナモジカイの 500 字制限は，1931 年 5 月に文部省臨時国語調査会が制定し発表した「常用漢字表」が 1858 字もあったことから，それを削減する目的でつくられました。

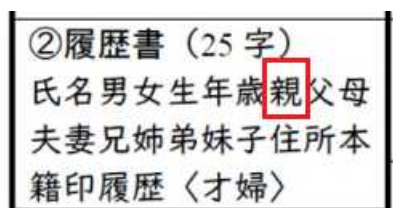
1934 年から 3 年間のあいだにおこなったいくつかの調査をもとに 500 字制限は，作成されました。服部報公会（現在はセイコーホールディングス関連の公益財団法人）から 1000 円の援助金を受けて完成させたといいます。

もとにしたのは，①新聞における使用度数，②児童の書きとり能力，③個人意見のしらべの 3 点でした。

カナモジカイがおこなったこれらの調査方法は，戦後の国立国語研究所や文化庁の新聞・雑誌・書籍・ウェブデータの使用状況調査（[5. 出現頻度参照](#)）や，文部省，文化庁，国立国語研究所などの児童・生徒の習得状況調査（[6. 習得状況やリテラシー調査参照](#)）にうけつがれました。

この一点だけでもたかく評価したいものです。

2. 夜間中学生のための生活基本漢字381字（見城慶和作成） 1975 年



見城慶和（漢字指導法研究会元委員長，現研究参与）ら都内の夜間中学校につとめる国語の教員が 1975 年に選定したのが，夜間中学校の生徒の教育課題に応じた「**生活基本漢字**

381 字」です。「日常生活に欠かせない基本的な漢字の読み書きができる力」を身につけることを目標にしています。

「親」は，「履歴書」25 字のなかにあります。

漢字表は，国字研・漢字指導法研究会のウェブページで公開しています。

★[国字研・漢字指導法研究会](#)ウェブページ

3. 「日本語基本漢字『未来』500字」案 竹端瞭一（たけば りょういち）1990 年

信神真進新親人(ス)図水数(セ)世正生

（『川村学園女子大学研究紀要』第2巻，1991年3月）

竹端瞭一（たけば りょういち）が1990年にとりまとめ1991年に発表した「日本語基本漢字『未来』500字の考え：日常用・入門用として」です。

竹端は、1990年までに公表された7種の「基本漢字表」をとりあげ、そのひとつひとつを検討し、この「『未来』500字案」にとりまとめました。

1) STB 漢字 450 字 1970 年

日本 STB 協会の提案。STB とは science technology business の略。

（『漢字は 500 でたりる』これからの実務漢字，日本 STB 協会，1971 年）

★[国立国会図書館](#)サーチ

2) 書き漢字 600 字大久保素案 1988 年 国字研大久保忠利第一次私案

3) 早稲田大学日本語教科書 約 500 字，1972 年

早稲田大学語学教育研究所編『外国学生用日本語教科書』初級，1972 年

4) 『わかる日本語』第 1 ～第 2 368 字，1978 年

今井幹夫『わかる日本語』第 1，第 2，千駄ヶ谷日本語教育研究所，1978 年

5) 生活基本漢字表 1988 年 夜間中学生のための生活基本漢字381字

6) 『日本語初歩』新出漢字 383 字 1989 年

鈴木忍、川瀬生郎、国際交流基金日本語国際センター編『日本語初歩』凡人社，1981 年

7) 韓国高校の日本語教科書 3 種 1987 年

韓国の教科書会社，知学社，教学社，時事英語社の 1984 年版『高等学校日本語』教科書上下 2 巻（1987 年発行）に共通して使われている漢字が約 500 字あったとする。韓国では 1973 年から高等学校の教育課程に第 2 外国語として日本語が導入されている。なお，竹端は韓国・朝鮮の言語政策や文字改革について多数の論文を発表してきている。

（各案の名に付している年は，竹端による。公開時期がことなる場合がある。）

竹端 瞭一は，元川村学園女子大学大学院教授，元西オーストラリア大学日本研究科客員講師，元財団法人日本のローマ字社理事。すでに鬼籍にはいった。

4. 「日本語教育の参照枠」における「基礎漢字」122字（文化審議会国語分科会）2021 年

該当なし。「友・名・母・父・女・男」はあるが，「親」はとりあげていない。

（『日本語教育の参照枠』報告 文化審議会国語分科会 2021 年 10 月 12 日，P.68）

5. 出現頻度

2022 年公表の最新調査で出現頻度 [しゅつげんひんど] 205 位。比較的よく使用されていることがわかります。

1. 「現代新聞の漢字」国立国語研究所 1976 年

音訓では [おや] がいちばん多く使われています。[したい] [したしむ] などは、わずかしが使われていなかったことがわかります。

1966 年 1 月 1 日付け～1966 年 12 月 31 日付けの「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」3 紙の朝夕刊全紙面につかわれた漢字を異なり字種ごとにまとめ、順位づけています。

それによると「親」は、つぎのような順位となっていました。

使用数 全体順位	377 位	使用数 676	全体使用率 0.682 %
使用数 層内順位	政治 695 位, 社会 240 位, 経済 946 位, 文化家庭 165 位, 運動芸能 284 位, 広告 629 位		

用語例

377 親* 676

シン 【235/28】

親衛(～隊) 親共(～主義者) 親近 親軍 親交 親子(養～) 親授 親書 親切⁴⁸ 親善³¹ 親ソ 親族 親等 親日 親王 親仏 親米 親ぼく(親陸) 親身 親密 親友 親類¹⁶ 親和(社名) / 愛親(～会) 懇親 肉親[肉身] 両親⁶⁷

親-(～中国派)

おや 【305/21】

親¹¹⁴

親犬 親方 親ガメ 親代わり 親子(親娘)[母娘・母子・父子・父娘]²³ 親心 親殺し 親爺 親玉 親豚 親分 親元 親譲り 親指[拇指・おや指] / 職親 せり親 父親⁷⁴ 母親¹²³

親-(～会社) / 一親(名づけ～)

したい 【44/4】

親しい¹² 親しさ 親しみ 親しむ²⁶

人地 【12/6】

親鸞^{11/5} 親彦 / 清親 敬親 忠親

親の原^{1/1}

左表について

◎音訓ごとの使用数

【のべ使用数／ことなり語数】

◎語の右横の数

その語の使用数。9

以下のものは省略。

表中の記号

<自立>……・𠂔

<結合>……・𠂔

<接辞的>……・𠂔

<数詞>……・𠂔

<略語>……・𠂔

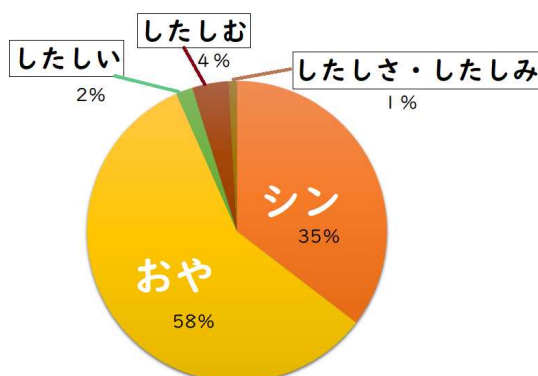
<借字>……・𠂔

<特殊訓>……・𠂔

<人名>……・𠂔

<地名>……・𠂔

用語使用数順 (30件以上)	
母親	123 件
親 [おや]	114 件
父親	74 件
両親	67 件
親切	48 件
親善	31 件



この調査結果から、つぎのことがわかります。

音訓別の使用状況（人名・地名をのぞく）をみると，[おや] が385 件（使用割合 58 %）といちばん多くつかわれています。語例も「母親」「親」「父親」「親子」などがめだちます。

ついで [シン] の 235 件（使用割合 35 %）となっています。「両親」「親切」「親善」などが多く使われています。

訓の [したしむ] が 26 件（使用割合 4 %），[したしい] 12 件（使用割合 2 %）しかなく，[したしさ][したしみ] を合わせて「親しい」系の語は 44 件（使用割合の計 7 %）しかありません。

常用漢字表にある [したしい][したしむ] などは，わずかしが使われていなかったことがわかります。

なお，報告書で「標本使用度数」とあるのを，ここでは「使用数」とおきかえ，また助数詞を件としました。

2. 文化庁「漢字出現頻度表」

文化庁は，一般の社会生活における漢字の使用状況を把握するために，書籍等にもちいられている漢字の出現頻度をデータ化した「漢字出現頻度数調査」をこれまでに4回実施しています。

第1回「漢字出現頻度数調査」1997年11月

凸版印刷・大日本印刷・共同印刷と，読売新聞のデータ。

第2回「漢字出現頻度数調査（2）」2000年3月

凸版印刷と読売新聞のデータ。

*上記2回の調査は，「表外漢字字体表」（2000年12月8日国語審議会答申）作成にむけた基礎資料にしたといっています。

第3回「漢字出現頻度数調査（3）」2007年3月

凸版印刷と朝日新聞・読売新聞，ウェブサイト上のデータ。

* 2010年「常用漢字表」改定にむけた基礎資料にしたといっています。

第4回「漢字出現頻度数調査（4）」2022年2月

凸版印刷のデータ。

以下、現状を反映する第3回と第4回のデータをかかげます。

「漢字出現頻度表（3）」（漢字出現頻度数調査（3）2007年3月）

全体順位 172 位。教科書での出現例は 443 位。新聞での出現例は 300 位台。

漢字出現頻度表 順位対照表(Ver.1.3)

凸版(3) 順位	漢 字	種 類	表外漢字 字体表	新聞調査 (朝日)	新聞調査 (読売)	ウェブ データ A	凸版(3) 第2部
170	安	常用		84	86	111	142
171	兵	常用		563	618	1046	255
172	親	常用		346	312	309	443
173	六	常用		793	761	987	455
174	治	常用		183	188	394	48

2010 年常用漢字表改定の際に、文化審議会が改定作業に使った資料。審議では、一般の書物である「凸版（3）」調査を基本資料とし、他の調査を補助資料と位置づけた。

凸版(3) 順位	2004 年から 2006 年までに凸版印刷が製作した 864 冊分の組版データ
新聞調査 (朝日)	2006 年 10 月 1 日から 11 月 30 日の期間の朝日新聞の紙面データ
新聞調査 (読売)	2006 年 10 月 1 日から 11 月 30 日の期間の読売新聞の紙面データ
ウェブデータ A	2007 年 2 月、4 月、6 月のウェブサイトのデータ
凸版(3) 第2部	凸版（3）調査のうち教科書のためのデータ

(2008 年 5 月 12 日 文化審議会国語分科会漢字小委員会資料)

国字研の「2009 年改定教育漢字精選案」（現・小学校学習漢字精選案）のとりまとめには、この「漢字出現頻度数調査（3）」を利用しました。

「漢字出現頻度表（4）」（漢字出現頻度数調査（4）2022年2月）

全体順位 205 位。教科書の出現回数 1107 件。

漢字出現頻度表

			全 体			辞典類		単行本		週刊誌		月刊誌		教科書	
順位	種類	漢字	出現回数	度数%	累積度数	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%
201	常用	係	61986	0.121	50.448	17060	0.228	14643	0.079	9128	0.133	18898	0.115	2257	0.110
202	常用	直	61440	0.120	50.567	6109	0.082	24840	0.135	8012	0.117	20582	0.125	1897	0.093
203	常用	美	61343	0.120	50.687	3110	0.042	23661	0.128	8428	0.123	24918	0.151	1226	0.060
204	常用	規	60852	0.119	50.806	38046	0.509	5661	0.031	2536	0.037	13089	0.079	1520	0.074
205	常用	親	60513	0.118	50.924	3011	0.040	27589	0.150	9097	0.133	19709	0.120	1107	0.054
206	常用	権	59945	0.117	51.041	2541	0.034	13188	0.072	7260	0.106	31057	0.188	5899	0.289
207	常用	笑	59586	0.116	51.157	1194	0.016	27656	0.150	7764	0.113	22748	0.138	224	0.011

2010 年常用漢字表改定から 10 年あまりが経過したことから、文化庁が定着状況の確認と、今後のみなおしに活用することを目的に、凸版印刷の組版データをもとに、数値化したものです。のべ 5125 万 8216 字、そこに出た漢字の総数（ことなり字種）は 7269 字で、「親」はそのなかの出現回数が 205 位でした。一般の社会生活で、比較的よく使われている漢字の部類にはいります。これが「出現頻度」の最新調査といえます。

6. 習得状況やリテラシー調査の結果

こどもになじみがない訓の「したい」「したしむ」の習得が困難だということがわかります。

1. 文部省「漢字学習指導実験調査」1952年－1955年

当用漢字別表（教育漢字）881字の時代に文部省が実施した調査です。

「小学校学習指導要領」に「学年別漢字配当表」を設定することを目的に漢字の学習指導順位の基準をさだめるために実施したといえます。そのため文部省内に「漢字学習指導研究会」を設置し、25人の委員と35の実験学校を指定して1952年から1954年の3年間をかけて調査をすすめています。そして最終報告を1955年にとりまとめました。調査の対象としたのは小学校1年から6年までで881字すべてをそれぞれの試案の学年で実施しています。

調査問題の形式

「親」は試案で3年配当となっていました。3年間にわたり、3年生の学年末にテストを実施しています。3年間分をあわせた正答率と、その学年内の順位は、つぎのとおりでした。

「親」配当試案 3年、音訓「おや」
読み 72 %
(正答順位 103 位／全 170 字)
書き 41 %
(正答順位 131 位／全 170 字)

決して良好な結果とはいえませんが、「親」は、試案の3年に配当されることに決定されてしまいました。

(文部省調査局国語課『教育漢字の学年配当』
漢字学習指導実験調査報告, 教育出版, 1957年)

★[国立国会図書館サーチ](#)

☐ あん 心しん する。 ☐ かん 心しん する。 ☐ ばい する。 ☐ おや 子こ 。	☐ のなかに かんじを かいてください。	4年 かき問題 一部 安()心しん。 感()心しん。 心()配しん。 親()子こ。 弟()。 病()気()。	4年 よみ問題 一部 ()のなかに よみかたを かなで かいてください。
--	---	---	---

2. 栃木県日光市立清滝小学校調査 1956 年 2 月

栃木県日光市立清滝小学校が 1956 年 2 月下旬に全校児童を対象におこなった調査です。前出の文部省「漢字学習指導実験調査」でとりまとめた「学年別漢字配当表」試案を検証し、1958 年「小学校学習指導要領」の改訂で、はじめての「学年別漢字配当表」を発表するのに先立っての最終調査でした。

テスト問題は、文部省「漢字学習指導実験調査」でもちいられたものを利用したといえます。「親」の場合は、「親子」の読み・書きです。調査は、同一の日時に、3 年生だけでなく、2 年生から 6 年生までうけています。

各学年ごとの正答率（％）

読み							書き						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
親 3年配当			1	73	80	88	91		1	41	39	47	74

空欄は調査対象とならなかった学年。

正答率 50 ％に満たない結果を赤字でしめしました。3 年で学んでいます、書きで 50 ％をクリアできたのは、6 年生だけです。書きがかなりむずかしいことがわかります。

さかのぼりますが、1953 年 4 月に栃木県上都賀郡日光町立清滝小学校（1954 年に市制施行により日光市立となる）は「文部省初等教育実験学校」の指定を受けました。「読解のつまずきとその指導」の研究課題のもとに、「読解力を高める一助として」3 年間にわたり当用漢字別表（教育漢字）881 字の全数調査をおこなったといえます。その最終年度にあたる 1955 年度末におこなったのが、前記調査です。

多くの学校現場が「出たところ勝負」であったところを、同校は、義務教育期間中に、教育漢字 881 字をどのように学べるようにするかについて、かなり意識的にとりくんでいたことが、おしはかれます。それでもこの結果です。指導法や出題の適否など要因はほかにもあるでしょうが、「親」の字の書きが、こどもにとって「むずかしい」字であることはまちがいないようです。こうした結果がありながら、2 年後、1958 年の「学年別漢字配当表」で正式に「第 3 学年」に配当されたのです。

（文部省、初等教育研究資料第 19 集『漢字の学習指導に関する研究』明治図書、1957 年）

★[国立国会図書館サーチ](#)

3. 「文化庁調査」（6年間調査）1964年 - 1969年

1958年告示、1961年4月実施のはじめての「学年別漢字配当表」における配当漢字と、「当用漢字」の習得状況を文部省がしらべたものです。

1964年度から1969年度にかけて6年間にわたりおこなわれています。

1964年度から1967年度までは、6都県の小学校計12校、中学校計12校で、1校につき各学年とも2学級を対象に継続調査をしています。

1968年度と1969年度は、10都道府県の公立高校計59校、110学級で継続調査しました。

途中、1968年には「小学校学習指導要領」が改訂され、「備考漢字」115字が追加されています。

文部省「漢字学習指導実験調査」（1952年－1955年）が教育漢字881字の学年配当に目的をおいたのに対して、この調査は備考漢字をくわえた996字の小学校学習漢字をふくむ当用漢字全1850字を対象にしました。

調査の結果は、1968年6月に文部省の外局として文化庁が発足し、それとともに1972年に文化庁の名で発表されました。

		学年別正答率 (%)							
調査漢字	調査問題	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1
親 3年配当	親 書き	59	84			93		95	
		70	97			100		100	
	親しい 書き								
									87.1

空欄は調査をしていない学年。

（文化庁文化部編、国語シリーズ67『児童・生徒の読み書きの力』当用漢字について、大蔵省印刷局、1972年）

前出の文部省「漢字学習指導実験調査」（1952年－1955年）や、「清滝小学校調査」（1956年）とくらべて、読み・書きともに成績がよくなったとして、文部省は、1968年告示、1971年実施の学習指導要領の改訂で、1学年下の2年で読みを指導することにしました。さらに1977年告示、1980年実施の学習指導要領の改訂で、2年配当にしてしまい、それがいまにつづいています。

4. 国立国語研究所「漢字の習得度調査」1982年 - 1984年

国立国語研究所が1982年から1984年にかけておこなった「漢字の習得度調査」の結果です。1981年に当用漢字表が廃止され、常用漢字表が制定された直後の調査です。なお1985年には「付表の語」についてのみ調査しています。

調査は、常用漢字 1945 字の一字一字を対象としました。うち小学校学習漢字 996 字は、1977 年告示、1980 年実施の「小学校学習指導要領」の学年配当をもとにしています。

3 年間で東京都内の小学校のべ 85 校、中学校 52 校、高校 20 校、秋田県の小学校 8 校、中学校 3 校、奈良県の小学校 13 校、中学校 3 校が協力しておこないました。(1985 年「付表の語」調査：東京都の小学校 3 校、中学校 2 校、高校 2 校)

主調査地域だった東京都の集計をもとに習得状況を以下にしめました。

「国立国語研究所調査」(東京都の集計) 1982 年 - 1984 年

「親」 2 年配当漢字／到達度調査時期：小学 3 年生 4 月

	音訓	調査問題	調査時期				
			小1年 11月	小3年 4月	小3年 11月	小4年 11月	小6年 11月
読み	シン	親友	7.5	83.0	86.4	92.1	97.0
書き	シン	わたしの親友	0.0	36.0	37.9	48.0	78.8
読み	おや	父親	14.5	87.5	91.3	96.4	98.5
書き	おや	父親にほめられる	0.0	61.0	69.2	85.0	90.5
読み	した-しい	親しい	0.0	21.0	18.9	46.1	64.5
書き	した-しい	親しいともだち	0.0	17.0	10.9	42.5	70.5
読み	した-しむ	親しむ	0.5	16.5	22.2	61.3	74.0
書き	した-しむ	読書に親しむ	0.0	6.0	14.9	39.9	67.0

(国立国語研究所報告 95『児童・生徒の常用漢字の習得』東京書籍、1988 年 3 月 25 日)

「親友」の書きは、2 年後の 4 年生の段階でも 50 %にいたってません。また、訓の「親しい」「親しむ」は、読み・書きともに、かなりむずかしいことがわかります。これらのことから、2 年生の子にとって「おや」以外の音訓が、かなりなじみがないということが想定されます。

この字が 2 年配当で適切なのか、また音訓の指導段階をどうすべきか、課題がありそうです。

この「漢字の習得度調査」は、国立国語研究所の言語教育研究部第一研究室がおこないました。言語教育研究部第一研究室長の**大久保愛**(1982 年度末退任後名誉所員)も参画しました。

そしてこの調査結果『児童・生徒の常用漢字の習得』は、「**国字研小学校第 3 次素案**」(1988 年 8 月発表)の作成にいかされました。

4. 国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査」2006 年

(特定の課題に関する調査 国語, 算数・数学, 国立教育政策研究所, 2006 年 7 月)

「親」 2 年配当漢字

(1) 小学校 4 年「書き」調査

問題「だれにでもしんせつにする。」 通過率 40.3 %

誤答例 「新切」「心切」など。

「親切」については、「同音・同訓の漢字を使った誤答が多かった」と報告されています。

ここでも、「親」の音[シン]の書きは、2 年後の 4 年生の段階でも 50 %に達していないことがわかります。

(2) 中学校 1 年「書き」調査

問題「古典にシタしむ。」 通過率 65.3 %, 無回答率 29.8 %

「34.7 %」が正答ではないが、そのうちの大半が「無回答」である。

国立教育政策研究所の研究チームは、調査結果から、「全体の傾向として、日常生活での使用頻度が低いものについては高い無解答率をしめしている。」
「読み」「書き」の問題とも、「日常生活で頻繁に使われる漢字は正答した割合が高く、逆に日常生活で用いられる場面が少ない漢字は正答した割合が低かった」との分析をしています。

7. 読みかた・音と訓

1 音 3 訓が、小学校段階にわりふられています。現状では小学校 2 年段階で指導することが想定されています。しかし、訓「したしい・したしむ」が小学校 2 年のこどもには、なじみがうすく、使用例もすくないことから、小学校段階での指導学年の検討がもとめられます。

1. 音訓

親	シン	当 常	(字音語素) 親ゆう, 親愛, 両親, 親せき
	おや	当 常	(名詞) 親子, 親ネコ
	した-しい	当 常	親しいともだち
	した-しむ	常	本に親しむ

当 「当用漢字音訓表」(1948 年) に収録された音訓。

常 「常用漢字表」掲載の音訓。

赤字 「国字研プリント」の文に掲出のコトバ。

2. 漢字音

[中国語音]《意味》		日本漢字音と語例
親	■ [qīn] 《したしい》	呉音・漢音 [シン] 両親・親近・親交・親展
	■ [qìng] 《姻戚関係》	

3. 同音・同訓の漢字（小学校学習漢字）

シン	森①, 心②, 新②, 申③中, 身③, 神③, 真③, 深③, 進③, 臣④, 信④, 針⑥
----	---

「おや」「したしい」「したしむ」は、同訓の漢字なし。

○数字：配当学年，中：中学校段階にわりふり

4. 小学校国語教科書における音訓の提出学年（2020 年版）

赤字が本文提出の音訓，黒字は巻末一覧表で提示

	光村	教出	東書	学図
シン	2 年下巻	2 年上巻	2 年下巻	2 年下巻
おや	2 年上巻	2 年上巻	2 年下巻	2 年下巻
したしい	2 年上巻	2 年上巻	2 年下巻	2 年下巻
したしむ	2 年上巻	2 年上巻	2 年下巻	2 年下巻

小学校2年教科書本文の語

〔光村図書〕 ふるくからつたわるものに 親しみ ましょう。 (2年上, ことばあそびをしよう)
〔教育出版〕 親-子 (2年上, なかまの言葉と漢字)
〔東京書籍〕 同じところのある漢字 見(見学) - 親(親子) (2年下, かん字)
〔学校図書〕 じゅくしたどんぐりは、 親木 のねもとにおちはじめました。 (2年下, どんぐり)

5. 和語の語幹・活用語尾と【送りがなのつけかた】

したし ・い 【親しい】〈形容詞〉	通則1 例外(1)
したし ・む 【親しむ】〈自動詞五段〉	通則2 本則(2)
したし-さ 【親しさ】〈形容詞+接尾語「さ」〉	通則4 本則(2)
したし-み 【親しみ】〈名詞〉(形容詞+接尾語「み」)	通則4 本則(2)
したしく 【親しく】〈副詞〉	通則5 例外(3)

「送り仮名の付け方」1973年6月18日内閣告示(該当部分)

通則1 本則 活用のある語(通則2を適用する語を除く。)は、活用語尾を送る。

通則1 例外(1) 語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。【親しい】

〔例〕 著しい 惜しい 悔しい 恋しい 珍しい

通則2 本則「活用語尾以外の部分に他の語を含む語、含まれている語の送りが名の付け方によって送る。」

通則2 本則(2) 形容詞・形容動詞の語幹を含むもの。【親しむ】

〔例〕 怪しむ〔怪しい〕 悲しむ〔悲しい〕

通則4 本則「活用のある語から転じた名詞及び活用のある語に「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは、もとの語の送りが名の付け方によって送る。」

(2) 「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いたもの。【親しさ】【親しみ】

〔例〕 正しさ 憎しみ

通則5 本則「副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。」

通則5 例外(3)「他の語を含む語は、含まれている語の送りが名の付け方によって送る。」(含まれている語を〔 〕の中に示す。)**【親しく】**

〔例〕 少なくとも〔少ない〕

8. 書きかた・字体と字形

構成要素が3分割でき、既習の「立」「木」「見」の学習経験をいかすことができます。

1. 字体



小学校学習指導要領は、「漢字の指導においては、学年別漢字配当表に示す漢字の**字体**を標準とすること」としています。「**字体**」という点では、康熙字典体から現行字体まで大きな変化はみられません。

2. 各国の常用字体

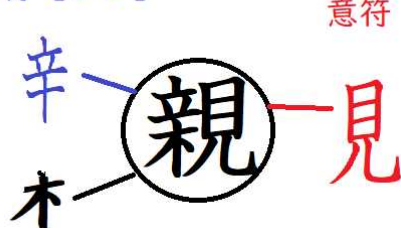
各国の常用字体の比較					日本「常用漢字表」 中国「通用規範漢字表」 台湾「常用国字」 香港「常用字字形表」 韓国「漢文教育用基礎漢字」
日本	中国	台湾	香港	韓国	
親	亲	親	親	親	
89AA	4EB2	89AA	89AA	89AA	

※それぞれの数字・記号はUnicode。

安岡孝一・安岡素子『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』（京都大学人文科学研究所，2017年）をもとに構成した。

3. 部首・偏旁冠脚

音符 [シン]



部首	説文解字	見部 [ケン部]
	康熙字典	見部 [ケン部]
	当用漢字表	見部 [ケン部]
	長沢規矩也	立部 [リツ部]

長沢規矩也は「親」が「立」から書きはじめることに着目し「立部」としている。

2019年5月例会資料「戦後の文字改革とむすびついた〈部首〉のみなおし」を参照。

「親」の部首について、現行の漢和辞典は「見部」[ケン部]としています。通称「みる」です。「見部」は、意符として、《見る》に関係する文字をつくります（字例「視・観・覧など」。「親」は《すぐそばで見る》という意味あいがあるといわれます。

音符の「辛」[シン]が変化して、省略形の「立」となり、「木」をくわえて現行字体となったとみられています。

4. 現行字体の構成要素



○数字：小学校配当学年。

㊦：常用漢字。

2010：2010年常用漢字表追加漢字。

立

立①, 音①, 新②, 親②, 顔②,
暗③, 意③, 童③, 章③, 倍③,
部③, 商③, 位④, 競④, 泣④,
億④, 鏡④, 辞④, 産④

(以下略)

見

(赤が「見部」の字)

見①, 親②, 覚④, 観④, 規⑤,
現⑤〔玉部〕, 覧⑥, 視⑥

(以下略)

木

木①, 休①, 林①, 森①, 本①,
校①, 村①, 体②, 楽②, 新②,

親②

(以下略)

辛

[シン]

(「辛」[シン]を音符とする字)

親②〔見部〕, 新②〔斤部〕,
薪㊦, 嘶 (表外字), 襯 (表外字),
梓〔シ〕 (表外字)

(「辛部」の字)

辛㊦, 辞④, 辣㊦ 2010

(「辟」[ヘキ]を音符とする字)

壁㊦, 避㊦, 癖㊦, 璧㊦ 2010

(その他)

宰㊦ (ㇿ+鼻 [ザイ])

P.24 「辛を構成要素にする漢字」参照。

5. 楷書の画数と標準的な筆順, さまざまな字形

親

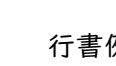
16画

親親親親親親親親親親

小学校硬筆例



行書例



印刷文字の字形の例				
明朝体	ゴシック体	ユニバーサル デザインフォント	UDデジタル 教科書体NR	学年別漢字 配当表
親	親	親	親	親

手書き文字の字形の例
親 親 親

『常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）』
文化審議会国語分科会（2016年2月29日）を一部改編

行書例は、中国、南宋から元にかけての書家・画家の趙 孟頫 [ちょうもうふ] (1254 年 - 1322 年) によるものです。

6. 字体の正誤についての評価における許容例

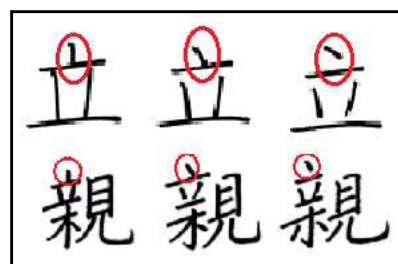
手書きの楷書では、点画の方向や接触の仕方や、長短などが異なっている場合があります。その漢字としての骨組みを読み取ることができれば、誤りではありません。

(1) 点画の方向

「立」中央上部の点画の方向のちがいは、
字体の判別のうえで問題とならない。

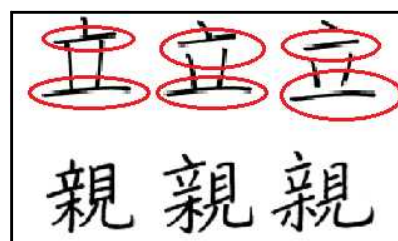
(2) つけるか・はなすか

「立」中央上部の点画とその下の横画とを、つけて書くことも、はなして書くこともあり、どちらも字体の判別のうえで問題とならない。



(3) つけるか・はなすか

「立」のたて画を、それをはさむ上下の横画に、つけて書くことも、はなして書くこともあり、どちらも字体の判別のうえで問題とならない。



(4) つけるか・はなすか

漢字の下部にある「木」の左右のはらいの始筆を、つけて書くことも、「ホ」のようにはなして書くこともあるが字体の判別のうえで問題とならない。



(5) はねるか、とめるか

「木」のたて画の終筆をはねて書くことも、とめて書くこともあり、どちらも字体の判別のうえで問題とならない。



(6) 長く書くか短く書くか

「立」「木」など複数の横画の長短のちがいは、字体の判別のうえで問題にならない。



(7) つけるか・はなすか

「目」の内部にある横画の終筆を、右側のたて画につけて書くことも、はなして書くこともあるが、字体の判別のうえで問題とならない。



7. 類似字形

親

新②

8. 口唱法

(1) 下村式 (『小学漢字学習辞典』偕成社)

立 [たち] 木の よこで 見る人は親

(2) 自由自在式 (『小学漢字新辞典』受験研究社)

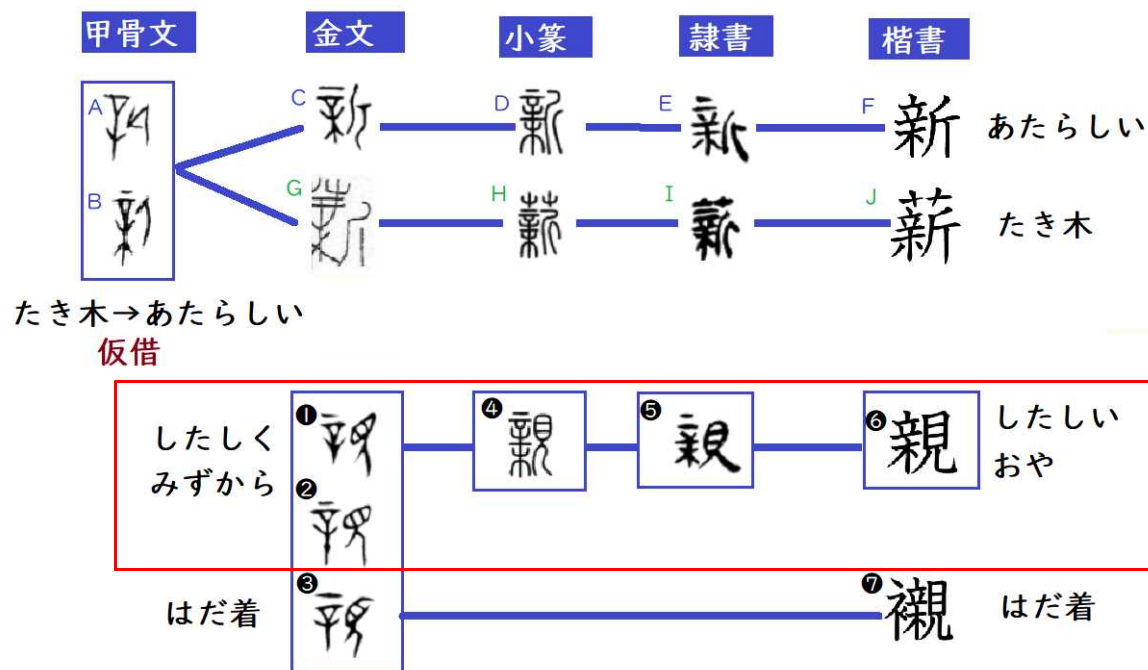
立った木を下から見るよな親心

* 「木のうえに立って、子どもの帰りを見ている人＝親」
 というのは根拠のない説。

「立」も「木」も「親」の意味とも、字源とも無関係である。

9. 字体の変転

当初は「辛+見」でしたが、やがて「亲+見」になって、いまにいたりしました。「親」の「亲」は、「立」や「木」とは無関係のようです。



「親」は、甲骨文にはみられず、金文が初出とみられます。金文の①②③は、ともに、「辛+見」から構成されています。小篆の④では、左半分の下部に「木」がくわり、「辛+木」となります。隸書の⑤以降、「亲+見」となり、いまの字体につづきます。

なお、金文③は《はだ着》の意味でつかわれており、「ころもへん」をくわえた楷書の「襯」[シン]につながりました。

〔出典〕金文① BC10 世紀初頭（西周中期）盂匭尊 [れいくそん] [P.39 参照]

金文② BC8 世紀初頭（西周末期）克罍 [こくはく] [P.40 参照]

金文③ BC9 世紀後期（西周中期）王臣簋 [おうしんき] [P.41 参照]

構成要素の「見」は甲骨文からあり、「目+人」の会意文字で、《ひとが目でみること》をあらわしています。「人」の部分が《ひとがひざまずくすがた》をかたどる「尸」[セツ]にしたがう異体字【右図 [イ]】もあります。

隸書のころから、この「人」の部分が「儿」[ジン]となり、現行字体の「見」になりました。



また「辛」[シン]も甲骨文にあり、「するどい針のかたち」にかたどった象形文字といいます。上部の「▽」は、「とっ手」とみられ、その上に「一」をつけた異体字【右図〔イ〕】もあります。「刑刀」《罪人にいれずみをする針》の意をもち、転じて《つみ》の意味をもつというのが有力な説のようです。



「親」の金文①②③は、どれも図の〔イ〕の字形を引いています。

「親」[シン]にとって「辛」がどのように位置づくか、諸説あります。

「辛」になんらかの意味をもたせるみかたもありますが、「辛」は[シン]という読みをあらわす形声音符であって、とりたてた意味はもたないとするのが、穏当なみかたといえます。

「新」の字形の影響をうけたとみられる「親」

同音の「新」[シン]は甲骨文にみられます。前ページ図の(A・B)です。

《おの》の象形の「斤」を意符とし、「辛」[シン]を音符とする形声文字です。

「辛」は、音をあらわすだけで、意味はもたないとするのが有力な説です。

「新」のもともとの意味は、《おので切った木》《たき木》をあらわしたといえます。そして仮借の用法で《あたらしい》の意味でつかわれるようになり、区別のために《たき木》の意味では、金文(c)以降「くさかんむり」がくわわり「薪」になったといえます。

B  甲骨文には、Bのように「辛」と「木」をあわせた「亲」をとるものもあります。《おので切った木》の意識がこうしたところにあらわれているようです。

「新」は、金文cからは完全に「亲+斤」が定着していき、いまの字体にいたります。

では、「親」[シン]の場合は、どうでしょう。金文の用例は、そう多くありませんが①②③のどれをみても「辛+見」です。小篆以降になって「辛」が「亲」に変化していきます。

この字体の変化は、おそらく、より多く、より古くからつかわれている「新」の影響をうけたのかもしれませんが。

つまりもともと「親」は、「辛+見」から構成され、筆写の習慣から「木」がくわわり、「木」自体に意味はないとみるのが順当といえます。

これらのことから、「親」の「亲」は、「立」や「木」とは、まったく関係がないことがわかります。

「辛」を構成要素にもつ字

「辛」を構成要素にする字には、「親」のほかに、つぎのようなものがあります。このうち甲骨文からあるのは、「辛・**新**・辟・壁・宰」などです。

甲骨文	金文	戦国時代	小篆
辛・ 新 ・辟・壁・宰	親 ・辞・辜	辣(𢇛・癩)・避・癖・壁	梓

甲骨文【辛】[シン] 象形文字。罪人に入れずみをする針の形にかたどり、《印をつける針》の意をあらわす。転じて、《つみ》の意にもちいる。

甲骨文【宰】[サイ]「宀+𠂔 [ザイ] = 罪・つみ」の会意文字。

原義《罪に対する刑罰として労役にあてられるドレイ》

基本義《つかさどる・とりしきる》「宰相」

金文【辞】(辭)[ジ]「辛 𠂔 + [ラン] (= おさめる)」の会意文字。

原義《罪をおさめさばく》

基本義《コトバ》「辞典」《やめる》「辞職」

金文【辜】[コ]「辛+古 [コ]」の形声文字。

原義《つみ・とが》。「無辜」

戦国【辣】[ラツ]「辛+刺 [ラツ] (束)」の形声文字。

原義《からい》。基本義《きびしい・むごい》「辛辣」

甲骨文【辟】[ヘキ]「辛+口 (くち) + 尸 (尸) [セツ]」の会意文字。

原義《つみ》。転じて《おきて》《きみ・君主》《さける》

基本義《さける・しりごみする》「辟易する」

甲骨文【壁】[ヘキ]「玉+辟 [ヘキ]」の形声文字。

原義《たま・玉器》、基本義《たまのようにりっぱなもの》「完璧」

戦国【避】[ヒ]「辵+辟 [ヘキ→ヒ]」形声文字。

原義《かたよりさける》。基本義《よける・のがれる》「避難」

《さける》は、もともと「辟」にある意味だったが、区別のためにこの字がつくられた。

戦国【癖】[ヘキ]「疒+辟 [ヘキ]」の形声文字。

原義《腹の病》。基本義《くせ・かたよった習性》「潔癖」

戦国【壁】[ヘキ]「土+辟 [ヘキ]」の形声文字。

原義《いえのかべ》。「壁面」

小篆【梓】[シ]「木+辛 [シン→シ]」の形声文字。

原義《皇帝の棺材》。

基本義《落葉高木の名。中国でノウゼンカズラ科、日本でカバノキ科》

派生義《版木・印刷する》「上梓」

10. 字源諸説

字源そのものが不明であり、なぜ《おや（父母）》《したい》となったのか、説得力ある説がありません。また全体をつらぬく基本的な意味は、《**あいだが近い**》とみられますが《おや》と《したい》のどちらが先行したかは不明です。

字源については、不詳です。おもな字源諸説を一覧します。

(1) 『説文解字』大徐本 10 世紀（原本 1 世紀）・陳昌治本 1873 年（形声文字）

「至也。従見親聲。」

《関係がきわめて至っている。「見」から構成され「親」が音。》

(2) 『説文解字繫伝』小徐本 10 世紀・四部叢刊初編 1919 年（形声文字）

「至。従見親聲。臣鍇曰密至也」

《至。「見」から構成され「親」が音。徐鍇 [じょかい] いう「このうえなく密接なこと」である。》

『説文解字』[せつもんかいじ] は、中国の現存する最古の字書です。後漢の 1 世紀末に成立しました。複数のテキストがあり、10 世紀なかばごろにあまれた弟の徐鍇 [じょかい] による『説文解字繫伝』（小徐本）と、兄の徐鉉 [じょげん] による『説文解字』（大徐本）が有名です。今日「説文」というときは、この大徐本を指すことが多いようです。

[検討] どちらも「したい」におすびつくとみられる意味を説明しますが、「おや」（父母）についての言及はありません。

『説文解字』は、「至也」と字義を説明しています。「至」は《行きつく・達する・目ざす所までとどく》という意味から、《極限にまでいたる》《もっともきわまった状態》《このうえなく・もっとも》などの意味をもちます。

そこで、「親」については、《**(関係がきわめて) 至っている**》ととらえられます。小徐本は、これを「密至」[みつし] というコトバで解説します。

「密至」あるいは「至密」[しみつ] は、《**このうえなく密接なこと。そのさま**》という意味があるコトバです。つまり「親」の字義を《**関係がきわめて密接なこと**》としているといえます。

なお、『説文解字』は、金文の「辛十見」を知らなかったころの説です。小篆の字体をもとに解釈していることになります。

(3) 『説文解字注』(通称『段注』) 段玉裁 [だんぎよくさい] (1735年-1815年)

おおまかに『説文解字注』をみると「したい」が先行し、それをもとに「おや」(父母)の意味がなりたったとしているようです。

中国の古典を文献学的・実証的に研究した清代考証学の代表者ともいえる段玉裁のこの書は、今日でも説文解字の研究で最も基本的な文献となっています。日本の漢和辞典の記述にも大きな影響をあたえています。

同書では、『説文解字』の「親」について、つぎのように注釈しています。

【親】至也。至部曰：到者，至也。到其地曰至，情意到曰至。
父母者，情之取至者也，故謂之親。

〔意訳〕「親」は「関係がきわめて至っている」ことである。『説文解字』の「至部」で「到」は「至」であるとしている。《ある場所にとどく》ほど近い「到」は、「至」という。「情意」(思い・気持ち)が《(到)とどく》のも「至」である。

父母は、「思い・気持ち」をあつめとどくものである。そこで、これ「親」《おや》という。

〔字釈〕【至】は《あいだがらが近い》意味をもつ。「至近」[しきん]とは、《きわめて距離が近い》ことをいう並列語。

【到】は《いたる・とどく》意味をもつ。後世の辞典で「刀部」に属することになるが、『説文解字』は「至部」に所属させていた。

【取】は「最」の異体字だが、『説文解字』では「最」[さい]と区別されていた。『段注』によると「取」[しゅ]は「聚」と同音同義という。字義は《あつめる》とみられる。

〔検討〕『段注』は、「至也」と「到」の字に着目し、《近しいあいだがら》が「親」の基本的な意味だとします。情意がとどくほどの関係が密接であるととらえると、日本語でいう「したい」がこれにあたるでしょう。

そして《近しいあいだがら》で《情意がとどく》ものとして「おや」(父母)の意味があるとしています。

この記述からは「おや」(父母)が基本的な意味にふくまれているのか、それとも引伸義なのかは明確によみとることができません。

(理解不足かもしれませんが。)

(4) 『説文解字注箋』(通称『段注箋』) 徐灝 [じょけい] (1810 年-1879 年)

おおまかに『説文解字注箋』(『段注箋』) をみると「おや」の方が「親類」といった基本的な意味の流れに近く先行していて、「したい」は派生義であるとみているようです。

19 世紀清代考証学者の徐灝 [じょけい] の『説文解字注箋』(『段注箋』) は、さきだってまとめられた段玉裁 [だんぎょくさい] 『説文解字注』(『段注』) を論じたものです。

この『段注箋』第十六巻に「親」があります。

注曰(段注いわく)至部 到者至也。情意懇到曰至。

父母者、情之取至者也、故謂之親。

箋曰(段注箋いわく)親從見、則其義起於相見。蓋見而相親愛也。

親愛者、莫如父子兄弟夫婦。故謂之六親。

引申、為凡切近之稱。

〔意訳〕『段注』がいう。『説文解字』の「至部」で「到」は「至」であるとしている。

「(情意) 思い・気持ち」が《きわめてていねいでゆきとどく》のも「至」である。

父母は、「思い・気持ち」をあつめとどくものである。ゆえに、これ「親」《おや》という。

『段注箋』はいう。「親」は「見」から構成される。すなわちその意味は「相見る」より起こる。思うに「見てたがいに親愛することである」。

「親愛すること」は、父子兄弟夫婦に及ぶものはない。だからこれ六親という。引いて、おしなべて「切近」をいうことになった。

〔語釈〕【相見】[しょうけん／そうけん]《あい見ること・あいまみえる・対面する》。

『春秋左氏伝』が初出のようである。

【親愛】[しんあい]《親密で友愛があること・なかよくする》。

『春秋左氏伝』が初出のようである。

【六親】[ろくしん／りくしん]《父子兄弟夫婦》あるいは《父母兄弟妻子》といった六種の親族をいう。そして広く《親族全体》をさしてもちいる。

『老子』『列子』などにみられる。

【切近】[せっきん]《すぐ近くにある・身近である・間近である》。

『易経』『春秋繁露』などにみられる。

「切近」については、次ページでふれます。

〔検討〕『段注箋』は、意符の「見」に視点をあて、この字の基本的な意味は《あい見る》《たがいにまみえる》とします。そして、あい見て《たがいに親愛する》意味をもったとかがえます。

さらに「親愛する」ことから「父子兄弟夫婦」をもちだし「親族」の意味があるとしします。「おや」（父母）については直接言及していませんが、おそらくこの「親類」の部類に属しているとみるのでしょう。

そして「切近」という意味は、引伸義だとします。これには、日本語でいう「したい」もふくんでいるようです。

「切」という字は、音のちがいが意味のちがいにまでおよぶ多音字です。声調を平声の陰平（第一声）で発音するA「切」[qiē]は《刃物で切る・切断する》というものです。「切断」「切る」などの語を形成します。

去声（第四声）で発音するB「切」[qiè]は《こすりあわせる》が基本的な意味のようですが、《近づく》《接近する》という意味があります。

「切近」[qièjìn]の「切」は、このB[qiè]の《近づく・接近する》にあたります。

辞書によると《近づく・接近する》という意味の「切」は、現代語でもつぎのようなコトバがならびます。

【切近】《すぐ近くにある・身近である・間近である・近接する》

【密切】《密接である》

【親切】（亲切）《親密である・したしみがある・こころがこもっている・あたたかい》

【関切】（关切）《気づかう・気にかける・配慮する・思いやりのある》

『段注箋』は、「引いて、おしなべて「切近」をいうことになった。」とします。つまり「親切」「親近」「親友」「親交」「親密」「親睦」「懇親」など「したい」「したしむ」をあらわすコトバは、この「切近」の意味のグループに属するということで、これらは引伸義（派生義）だというわけです。

このように「したい」「したしむ」を引伸義と断言していますが、それをいう根拠は、とぼしいといえます。

なお、ふつう「親愛する」を《したしみいつくしむ》ととらえられますが、どうやら『段注箋』の「あい親愛する」は《たがいに愛する》《たがいに敬愛する》《たがいに情愛をもつ》《たがいになかよくする》といった意味で、ここには日本語の「したしむ」はつながっていないようです。

この「親愛」の語の実証的な検証も必要といえます。

(5) 加藤常賢説（形声文字）…《**近くに見る**》がもともとの意味とみます。

加藤は、前ページでふれた『説文解字注箋』（『段注箋』）をもとに持論を展開します。直接ふれていませんが、「**おや**」の方が「親類」といった基本的な意味の流れにあり、「**したい**」は派生義であるとみているようです。

加藤は、「親」について『説文解字』にいうとおり“見”から構成され“**亲**”が音”とします。そして「この音の表す意味は“生”（古音はシン）である。“同姓”の意である。」といます。

「親」の意味は、「**近くに見る**」とします。

『説文解字注箋』（『段注箋』）のつぎの部分をひきます。

「箋曰、親従見、則其義起於相見。蓋見而相親愛也。」

（段注箋いわく）「親は見に従えば、すなわちその義は相見るより起こる。けだし見てあい親愛するなり。」

加藤は、「見てあい親愛する」という、この説明が「この字の正しい解釈である。」と断言します。

加藤は、さらに「相見る同姓の人は、同住人である。」「であるから“親”といえ、《父子・兄弟・夫婦》のごとき日常相見るものを指しているのである。」とまとめます。

つまり加藤は、《**近くに見て親愛する**》→《日常相見るもの》→《父子・兄弟・夫婦》そのなかの《**おや**》という順でとらえています。

『段注箋』がいう「切近」にはふれていませんが、《**したい**》は引伸義とみているのかもしれませんが。（『漢字の起原』角川書店、1972 年）

[検討] 加藤が「親」の意味を「同姓」「同住人」としていますが検証が必要です。「同姓」[どうせい]は古典中国語からみられます。《同じ一族》ととらえるのが基本的な意味です。つまり「同族」と同義といえます。

漢民族には父系の同族集団である「宗族」[そうぞく]があります。祖先をおなじくし、祭祀をともにおこない、墓もいっしょにする集団です。この集団は「同姓」です。「六親」もこれにくわるかは、よくわかりません。

BC200 年ごろ成立したとされる最古の意味別語イ集である『爾雅』[じが]には、「**親釈**」編という章があります。親族に関する名前や語義を解説しています。そこにはつぎのような説明があります。

「父之黨為**宗族**」[意識] 父がたの同族の集まり（党）を**宗族**となす。

「**族父**之子相謂為族兄弟，族兄弟之子相謂為親**同姓**」[意識] 父がたの曾祖父の兄弟の孫（**族父**）の子（一族の兄や弟），そのまた子らは**同姓**である。

加藤のいう「同姓」は、これらと関係あるのかもしれませんが不明です。

(6) 藤堂明保説（会意兼形声文字）…《近しい間がら》が先行するとみる。

藤堂明保はつぎのように解説します。

「辛〔シン〕は、はだ身を刺す鋭いナイフを描いた象形文字。「親」の左側の「亲」は「薪」〔シン〕の原字で、木をナイフで切ったなま木。「親」はそれを音符とし、「見」を加えた字で、ナイフで身を切るように身近に接して見ていること。じかに刺激をうける近しい間がらの意。」

（『学研漢和大字典』1978年）

〔検討〕字体の変転過程を追っても、「薪」〔シン〕の原字が「亲」である確証は得られません。

(7) 白川静説（会意文字）…《おや》が先行するとみる。

白川静はつぎのように解説します。

「辛と木と見とを組み合わせた形。「辛」はとっ手のついた大きな針。この針を投げて位牌〔いはい〕を作る木を選び、その新しく切り出した木で作った位牌を見て拝む形が「親」である。新しい位牌は父母の位牌であることが多く、廟〔びょう〕の中でおがまれている位牌は、父母の位牌であるから、「親」は「おや・父母」の意味となる。廟の中で新しい位牌をおがむのは親しい関係の者であるから、「みうち・したしい・したしむ」の意味となり、また、「みずから」の意味にももちいる。」

（『字統』平凡社、1984年）

〔検討〕ここでも解字に神がかった論を展開しています。「辛」に言及するのはいいのですが、位牌〔いはい〕とむすびつく点について、実証的な説明が必要です。

(8) 阿辻哲次説（会意兼形声文字）…《おや》が先行するとみる。

見と、木（き）と、辛（はり。立は省略形）とからなる。木材に針を打った神木で位牌を作り、これをあおぎ見ることから「おや」の意を表す。

（『新字源』改訂新版、角川書店、2017年）

〔検討〕「辛」を音符としている点だけが違うだけで、白川説をうけています。

小学生向け学習漢字辞典の字源解説

小学館 例解学習漢字辞典	「親」[シン]は「辛」[シン]（するどい刃物）と「木」とでできた字で、なま木を切ること。それに「見」（みる）をつけて、「すぐそばで見ているので、刃物で切られるように近々（ちかちか）とを感じる」という意味を表す。
学研プラス 新レインボー 小学漢字辞典	「親」[シン]（はだにじかに接する）と「見」（みる）を合わせた字。いつも身近に見てしたいこと。また、身近に接する人をあらわした。
光村教育図書 小学新漢字辞典	「見」（みる）と「親」（すぐ近く）とを組み合わせた字。すぐ近くで見ることから、子どもをそばで見守る「おや」を表す。
三省堂 例解小学漢字辞典	形声文字。「親」が[シン]という読み方をしめしている。「シン」は「ちかい」の意味を持ち、「近くによって見る」ことを表す字。「したい」として使われている。
ベネッセ チャレンジ 小学漢字辞典	形声文字。「見」（みる）と「親」[シン]（ちかづく）を合わせた字。ちかづいて見ることから「したしむ」という意味を表し、「おや」という意味にも使う。
旺文社 小学漢字新辞典	形声文字。意味を示す「見」と、音を示す「親」[シン]（ちかづく）を合わせた字。そばによって見ること。それから「したしむ」、さらに、子どものそばにいて見守る「おや」の意味に使われた。
三省堂 小学漢和辞典 （長沢規矩也）	「辛」は[シン]という音と「同姓」という意味とを表す。「見」と合わせて、「近くに見る同姓の人（＝親子・兄弟など）」「したしむ」の意味がある。

小学生向けの漢字辞典は、基本義を《したい》とするものと、《おや》とするものにわかれます。

小学館は、藤堂明保説をもとにしています。

学研は、藤堂明保に師事した加納喜光の説です。「親」を「はだにじかに接する」と《はだ着》の用例から引いているようです。《したい》を先行させ、引いて《身近に接する人＝おや》としています。

光村教育図書は、加藤常賢説をもとに《おや》を基本義としています。

三省堂例解、ベネッセ、それに旺文社は、「親」を《ちかい》《ちかづく》として、《したい》を先行させ、引いて《おや》としています。

三省堂小学漢和は、加藤常賢説と同様に、清代の考証学をもとに《同姓＝おや》を先行させ、引いて《したしむ》としています。

現行の学習漢字辞典の字源解説を一覧にしました。

これら学習漢字辞典の字源解説は、基本的に『漢和辞典』の字源説をベースにして、ある程度かみくだいてのべられます。

しかし、『漢和辞典』の多くは、

(1) 19世紀清代の考証学者の説、

(2) 20世紀はじめに発見された甲骨文の調査

にもとづく1970年代までの研究成果によるものです。

《したい》が先か、《おや》が先か

現代日本の漢和辞典には、清代の考証学者・段玉裁 [だんぎょくさい] の『説文解字注』をもとにしているものが多くあります。

さきにふれたように『説文解字注』は、《近しいあいだから》が基本的な意味で、「したい」を先行させ、派生して「おや」の意味があるとしています。これが漢和辞典の字釈順序の標準となります。(P.27 参照)

諸橋轍次の『大漢和辞典』は、「したしむ」「したい」「したしく・みづから」「したしくする」「したしみ」を先にあげ、つぎに「おや」「みうち」などの順でならべています。

藤堂明保『学研漢字大字典』も「したしむ・したい・ちかい」「したしく・みづから」「みづからする」を先にあげ、そのつぎに「おや・じかに接している父母のこと」「身近なみうち」をあげています。

小学生向けの学習漢字辞典もこの伝統をついでいる物が多く、《おや》を第一義とする光村教育図書と 三省堂小学漢和のほかは、どれもが《したい》を先行させています。

《したい》が先か、《おや》が先かは、いちがいに断定できないことですが、古典中国語の字義をはなれて、現代日本語の用例からみると《おや》のほうがまざっているようです。

10. 用例からみた字義

名詞の「おや」や副詞の「みづから（みずから）」が初期にみられる。

古典中国語における「親」のおもな字義（★が金文と『詩経』でつかわれた意味）

- A 名詞 (1) ★父母。おや。
 (2) みうち。親類。姻戚関係。
 (3) したしみ。したしみ信頼すること。信頼するひと。
 (4) ★はだ着。
- B 動詞 (1) したしむ。かわいがる。愛を寄せる。身近に接する。
 (2) ★「みづから」みずから事をつかさどる。
- C 形容詞 (1) 「チカーシ」血縁がもっとも近い。ちかい。
 (2) 「シターシ」したい。
- D 副詞 (1) ★「ミヅカラ」したしく。みずから。

「辛+見」から構成される「親」の字源説は、諸説あります。しかし、説得力あるものがみあたりません。「親」の字義について、初期のころの用例をもとにさぐります。ここでは前掲の西周代の金文 3 点 (P.22 ①②③) と、西周から春秋時代中期までの詩を収録する最古の詩集である『詩経』にある 4 点について、「親」がどのようにつかわれているのか、あたることにします。

初期の「親」の字義

殷代末期	BC11 世紀ごろ	①『詩経』副詞	みづから	(大雅・文王之什・大明)
西周初期	BC11 世紀ごろ	②『詩経』名詞	おや	(国風・豳風・東山)
		あるいは副詞	みづから	
西周中期	BC10 世紀初頭	① 金文 副詞	みづから	(盠駒尊 [れいくそん])
西周中期	BC9 世紀後期	③ 金文 名詞	はだ着	(王臣簋 [おうしんき])
西周末期	BC8 世紀初頭	③『詩経』副詞	みづから	(大雅・蕩之什・韓奕)
西周末期	BC8 世紀初頭	② 金文 副詞	みづから	(克鐘・克罍 [こくはく])
西周末期	BC8 世紀初頭	④『詩経』動詞	みづからす	(小雅・祈父之什・節南山)

[注1] 金文史料の「親」には、上記 3 点のほかに 1978 年河北省平山県の中山王 1 号墓から出土した鼎 [かなえ] に刻まれたものがある。BC4 世紀後期の戦国時代のもので、時代がくだっていることから、はぶいた。

[注2] 『詩経』掲載の各詩の成立年代は明確ではない。BC770 年に周は洛陽に移り、「東周」と呼ばれるようになり、諸侯が独立状態となって春秋時代がはじまる。『詩経』の詩の多くは、西周期のものもあるが、この東周期以降にうたわれたものもあるとみられる。ここでは、詩文がうたう内容の時期をこの表にあててことにした。

初期にみられる「親」の出典

字義 A 名詞 (1) 父母。おや。

西周初期 BC11 世紀ごろ ②『詩経』名詞 おや (国風・豳風・東山)
あるいは副詞 みづから

②『詩経』名詞 おや (国風・豳風 [ひんぷう]・東山)

親結其縞、九十其儀。

〔訓読案ア〕親 [おや] 其の縞 [り] を結び、九十なる其の儀 [ぎ]。

〔訓読案イ〕親 [みづか] ら其の縞 [り] を結び、其の儀 [ぎ] を九十にす。

「親結其縞」[しんけつきり] をどう読むかで、前記の2案にわかれます。

このフレーズは、のちに「結縞」[けつり] という熟語をつくりました。

「縞」[り] は《かざりのついた腰おび》です。古代中国では、成人女性が外出するときにそれをまとったそうです。

娘がとつぐときに、その「縞」[り] を母親が腰に巻く儀式があったといえます。それを「結縞」[けつり] といい、《婚約のしるし》でもあり、引いて《結婚》という意味もあわせもったそうです。

つまりそのことから考えると「親結其縞」は、《母親が(娘に)腰おびを結ぶ》とみることができます。

つづく「九十其儀」[くじゅうきぎ] は、《多くの作法》とみられます。結婚にあたって、両親は娘に対して、「外見に注意をはらうように」をはじめ、たくさんの妻としての作法をくりかえし指導したそうです。こうして《婚礼のよそおいをこらし》ました。それはまた、花嫁の態度の美しさを称賛することを指すことにつながりました。

一部に〔訓読案イ〕副詞「みづから」と読むむきもありますが、ここは名詞「おや」と読むことにしました。

我徂東山、惓惓不歸。
我來自東、零雨其濛。
倉庚于飛、熠熠其羽。
之子于歸、皇駁其馬。
親結其縞、九十其儀。
其新孔嘉、其舊如之何。

〔訓読案アによる意訳〕

東山に出征し、帰ることもなかった。

わたしは東から来たのだが(帰れるときは)雨である。

ウグイスが飛び、輝くかのように羽ばたく。

ここに帰ってきて、立派な馬がいる(ところを見た)。

親が(花嫁に)腰おびを結び、(婚礼の)よそおいをこらし。

この新しくとてもめでたいことも、

(わが妻よ) 昔のことでもどうすることもできない。

『詩経』（東山）の詩は、**周公旦**〔しゅうこう たん〕が東方に遠征し、勝利をおさめたのち、現在の西安市付近にあった王都に帰ったときにうたったとつたわります。周公旦は、のちの世に「周建国の功臣」「理想の聖人（孔子）」などとあがめられた人物です。

BC1046 年ごろ（BC11 世紀）、周公旦がひきいる軍は、東夷遠征にでんでいた殷の最後の王を背後から討って殷をほろぼしました。さらに数年後には、この東方を征討し、周の第2の都を現在の洛陽市に建設し、周王朝の基礎をかためています。

詩の内容は、兵士の立場でかたられていますが、ひきいた将兵の労をねぎらうために、周公旦自身がよみあげたという説が有力のようです。

このほか、帰還する兵士がうたった詩、都の官僚が周公旦をほめたたえてうたった詩などの説があります。

いずれにしても、ずっとあとにつくられたものではなく、同時代か、あるいはややあとの作品ととらえていいようです。早い時代から《おや》の意味で「親」がつかわれていたことがわかります。

このほか《おや》の意味で「親」がつかわれた例は、BC2 - 1 世紀ごろにあらわされたつぎの書物にみられます。

◎『孟子』離上「仁之実事親是也」〔意味〕仁の内実は親に仕えることである。

*『孟子』BC4 - 3 世紀の儒学の思想家・孟子の思想をまとめた書物。

◎『春秋公羊伝』莊公三十二年「君**親**無將，將而誅焉。」

〔意味〕君と**親**に対しては、殺そうと思うことすらあってはならぬ。そう心に思っただけで、誅殺されなければならない。

*『春秋公羊伝』〔しゅんじゅうくようでん〕春秋時代、孔子の出身地・魯〔ろ〕の歴史を中心に編年体で記した史書である『春秋』の注釈書のひとつ。戦国時代の齊〔せい〕の学者・公羊 高〔くよう こう〕が著述したと伝えられるが、じっさいのところは、多くの人の手がくわえられ、BC2 世紀前漢のころにまとまったと考えられている。

◎『礼記』奔喪篇

「奔喪之禮：始聞**親**喪，以哭答使者，盡哀；問故，又哭盡哀。」〔注〕親，父母也。

〔意味〕奔喪の礼について言うと。他国にいて、始めて**親**の死を告げられた人は、まずその使者に向かって哭泣〔こくりゅう〕し、ひどく悲しみながらも事の次第を問い、さらに哭泣し、悲しむ。

◎『礼記』問喪篇「**親**始死，雞斯徒跣，扱上衽，交手哭。」

〔意味〕**親**が死ぬと、まず頭は冠をぬいで、かんざしと元結を残すだけとなり、足ははきものをぬいでだしとなり、両手を交え、泣きおどる。

*『礼記』〔らいき〕儒家の礼法や文化についての論集。周から前漢にかけての儒学者がまとめた礼に関する記述を、BC2 - 1 世紀前漢の時代にまとめたとみられている。

字義 B 動詞 (2) 「みづからス」 みずから事をつかさどる。

西周末期 BC8 世紀初頭 ④『詩経』動詞 みづからす (小雅・祈父之什・節南山)

④『詩経』動詞 みづからす (小雅・祈父之什 [きほのじゅう]・節南山)

弗躬弗親、庶民弗信 [ふつきゅうふつしん しょみんふつしん]

「躬 [きゅう] らせず 親 [しん] らせずんば、庶民信ぜず」

〔字釈〕

【弗】(打ち消しの助字) …ず。…ない。

【躬】①〔名詞〕み。からだ。

②〔動詞〕うやうやしくする。

③〔副詞〕みづから。自分で。

【親】〔動詞〕みづからす。

弗躬弗親、庶民弗信。勿罔君子。式夷式已。無小人殆。瑣瑣姻亞。則無臚仕。

〔訓読例〕

政「まつりごと」を親(みづか)らせねば、民びとは信「まこと」とせぬ。問いもせず察「はか」りもせねば、君子も勿罔「あざむ」きあなどろう。夷「たいら」に正しきに処「お」り、小人「たみ」を殆「あやう」うさせてはならぬ。取るにも足らぬ縁「ゆかり」の者を、臚「あつ」く用いてはならぬのだ。

〔意訳〕

(周王は) 国政を大切にせず、(悪がしこい臣下に
まる投げして) みづからしない、
だから民は(周王を) 信じない。
(周王は) 賢人に国政を問わず、仕えもさせない、
そこで君子は、ないがしろとされるだろう。
公平にして、えこひいきをやめ、
民にわざわざいをもたらしではいけない。
とるにもたらぬ姻戚を重用してはいけないのだ。

(目加田誠『詩経』講談社学術文庫、1991 年)

「祈父」[きほ] は、おそらくこの詩をよんだ人物名で、「節南山」は、西安市の南東にある、いま「終南山」と呼ばれる山とみられます。

鈴木修次* によると西周末期の「社会詩」だそうです。

後世「愚王の典型」と評された BC8 世紀、西周最後の王(第 12 代)である幽王[ゆうおう]を痛烈に非難した詩といわれます。

*鈴木修次「西周の没落を詩経から見る」『漢文教室』12 号、1954 年 5 月、大修館書店

字義 D 副詞 (1) 「ミヅカ-ラ」したしく。みづから。《自分で直接に》

とくに王など統治者がみづからすることをいうケースが多い。

殷代末期	BC11 世紀ごろ	① 『詩経』 副詞	みづから	(大雅・文王之什・大明)
西周中期	BC10 世紀初頭	❶ 金文 副詞	みづから	(盠駒尊 [れいくそん])
西周末期	BC8 世紀初頭	③ 『詩経』 副詞	みづから	(大雅・蕩之什・韓奕)
西周末期	BC8 世紀初頭	❷ 金文 副詞	みづから	(克鐘・克罍 [こくはく])

① 『詩経』 副詞 **みづから** (大雅・文王之什 [ぶんおうのじゅう]・大明)

殷代末期 BC11 世紀ごろ，周国の君主「**文王**」が，きさきをむかえたときのことをうたっています。

きさきとなった**太姒** [たいじ] は，「文王」とのあいだに 10 人の男子を産み，次男の「武王」が周朝を創設し，西周第 1 代の王となります。

また，前述の「② 『詩経』 国風・豳風 [ひんぷう]・東山，名詞 おや」でふれた周公旦もこの女性の子で「武王」の弟にあたります。

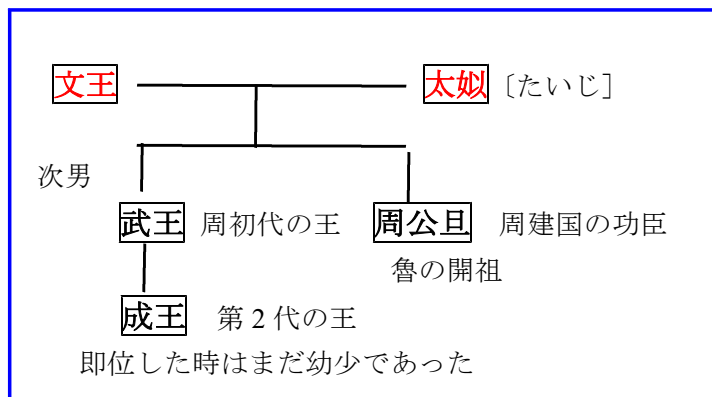
「文王」と「武王」は，のちの世になっても聖王としてあがめられており，この詩は，それを反映しているのかもしれませんが。

〔意識〕
大国に優れた娘あり、
天の妹にもたとえられる。
文王は礼をもつてその吉祥を定め、
みづから渭水に迎えに行き、
舟を並べて橋を作った。
その栄光の輝かしいことよ。

大邦有子、
文定厥祥、
造舟為梁、
不顧其光。
親迎于渭。
俎天之妹。

文王は，殷代末期の周国の君主。首都を岐山の麓（現在の陝西省宝鸡市岐山県）から，渭水 [いすい] の支流である澧水 [ほうすい] 西岸の豊邑（現在の陝西省西安市）に移し，この地を豊かにしていったとされる。

渭水 [いすい] は，現在の西安市付近を流れる黄河最大の支流。



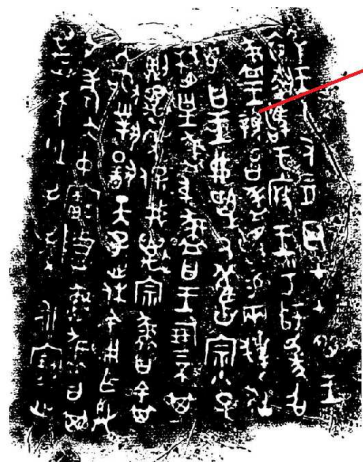
① 金文 副詞 みづから (盃駒尊 [れいくそん])

親

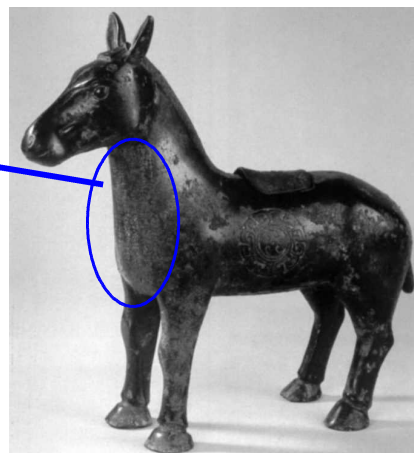
西周中期（紀元前 10 世紀初頭）につくられた「駒尊」[くそん]というウマのかたちをした青銅製の盛酒器の胸の部分にきざまれている 94 字のうちのひとつです。盃 [れい] というひとが周王（西周第 4 代「昭王」）から子馬を贈られたことを記念して作った駒尊ということで「盃駒尊」[れいくそん]とよばれます。

「意識」周王は、みづから盃「れい」に子馬（駒）を二頭（両）賜る（易）と、みことのりする（旨＝誼）。

王親旨盃駒易両



親



背中の部分にフタがあり、体内に酒をそそぐことができる。
1955 年陝西省宝鸡市眉县李村で出土（中国国家博物館蔵）

③ 『詩経』 副詞 みづから

(大雅 [たいが]・蕩之什 [とうのじゅう]・韓奕 [かんえき])

西周末期 BC8 世紀初頭の第 11 代「宣王」の臣下である韓奕 [かんえき] のひととなりをうたった詩です。

文中の「王、みづからこれに命ず。」は、「宣王が親しく韓奕に命じて、諸侯となした」という意味だそうです（朱熹

「意識」
光輝く梁山は、かつて禹王が切り開き、その道を王が越える。
韓侯は王から命を受け、王、みづからこれに命ず。先祖と同じくうけつぐように。わが命令にしたがわないうやめることなく、朝から晩まで解くことないように。命じられたその位をつつしむこと、わが命令は絶対である。
来朝をせぬような不忠のものを正し、そなたの主を補佐するのだ。

奕奕梁山、維禹甸之、有倬其道。
韓侯受命、王親命之、續戎祖考。
無廢朕命、夙夜匪解。
虔共爾位、朕命不易。
榦不庭方、以佐戎辟。

『詩経集伝』)。のちの世に「宣王の名臣・韓侯」とつたえられています。

② 金文 副詞 みづから (克鐘 [こくしょう]・克罍 [こくはく])

図②

西周晩期（紀元前 8 世紀ごろ）につくられた青銅製の楽器にきざまれていたものです。1890 年に同じ地点から同時にいくつものさまざまな青銅器が出土していますが、そのなかの「鐘」[しょう] 1 件と、「罍」[はく] 1 件に、それぞれ 1 点ずつ「親」がみられます。



鐘 [しょう]
高さ 140 cm
ほどのつきがね。
(奈良市・寧楽美術館蔵)



罍 [はく]
高さ 63 cm ほど
のつきがね。
(中国・天津博物館蔵)

1890 年陝西省岐山県法門寺任村から出土

図②は、「罍」[はく] にみられるものですが、「鐘」[しょう] にある「親」の字形もほとんどかわりありません。

ともに青銅器を制作させたぬしの名が「克」[こく] ということから、こんにち、これらは「克鐘」[こくしょう]，「克罍」[こくはく] とよばれています。

〔意訳〕周王、みづから克に命（令）じ、涇東
〔けいとう〕を適〔めぐ〕りて、京師〔けいし〕
（自）に至らしむ。

王親令克適涇東至于京自

（一部）

克氏は、陝西省の北東部の岐山の大家族だそうです。天子（周王）からの賜わりものに感謝し記念して作ったといひます。

銘文の内容は、周王（第 11 代「宣王」）がみづから（したしく）克に涇東の地域を巡察するように命じ、車や馬を下賜されたことが書かれています。

「涇東」は、「涇水」[けいすい] の東方地域。現在の西安市付近のようです。

「涇水」[けいすい] は、西安の東方で渭水 [いすい] にそそぐ川。

「京師」は、今の陝西省にある丘陵地だそうです。

字義 A 名詞 **はだ着・下着** のちに「襯」[シン] という字体となった。

西周中期の金文に、のちに「親」と区別するためにつくられた「襯」の意味で「親」がつかわれた事例が一件みられます。以降もふくめて、このほかに《はだ着》の意味で「親」がつかわれた例はないようです。

西周中期 BC9 世紀後期 ③ 金文 名詞 **はだ着** (王臣簋 [おうしんき])

- ③ こんにちは「王臣簋」[おうしんき] とよばれる青銅器の本体の底と、ふたに同じ銘文 85 字がきざまれているうちの「親」の字です。
 簋 [き] は、穀物を盛るのに用いられたとされる器です。
 周王が臣下におくいたことがらを説明しているため、「王臣簋」という名がつけられたといえます。

③ 図は、ふたの部分からとったものですが、本体の底の銘文も同じ字体です。そこにはつぎのように記されています。

易女朱黃、奉親

[意訳] (周王が) そなた (女=汝) 高貴で (朱) 公平である (黄=衡) と、いろどりを (奉=貢) **はだ着 (親=襯)** をたまわ (易=賜) す。

佳 (唯) 二年三月初吉庚寅、
 王各 (格) 于大 (太) 室、(益) 公
 入右 (佑) 王臣、即立 (中) 廷、北
 鄉 (嚮)、乎 (呼) 内史 (敖) 冊命王
 臣、易女 (錫汝) 朱黃 (衡)、**貴親 (襯)**、
 玄 (玄) 衣、黼屯 (純)、鑾旂、五日、
 戈 (畫)、必 (厚祕)、彤
 沙 (綏)、用事。王臣手稽
 首、丕敢顯天子對揚
 休、用乍 (作朕) 文考易中



「西周簋」(北京・故宮博物院蔵)
 高さ 19.2cm, 直径 24.5cm



親

(上図は、ふたの部分の拓本)

「王臣簋」は、1977 年に陝西省の西周時代中期の墓から出土しており、高さ 22.3cm, 直径 20cm, 腹部の深さ 10.7cm のものです。図版・写真等にあたることのできないので、にたものを左にしめました。

12. 字義・意味の変転

現代日本語における意味分類

		語 例
A	「 おや 」うみのおや 《近くで見ている》	「両親」
A'	みうち・血縁のもの	「親族」
A''	〔日本語用法〕「 おや 」中心になるもの・中心になるひと	「親指」
B	「 したしい 」なかがよい・つきあいがふかい・身近に接する 《なかよし》	「親友」
B'	本人自身で	「親展」

「親」の変転状況

上記、A と B は、意味の変転過程をたどると明確に区別できない。B が A を引伸したり、逆に A が B を引伸したりしている。どれが基本義でどれが派生義かは明確に位置づけることができないので、ここでは品詞別にならべた。

原義 「見」《ひとが目でみること》と「辛」[シン]を音とする形声文字。

「辛」は「するどい針のかたち」にかたどった象形文字だが、「新」と同様に、意味をもたない音のみをあらわす音符とみる。「辛」の下部が「木」をくわえて「亲」となるが、「新」は「木」の意味をもたせて字体を形成した。しかし「親」は、さきにうまれた「新」の字体にひかれて、ただ「亲」としただけで、「木」とは無関係とみる。

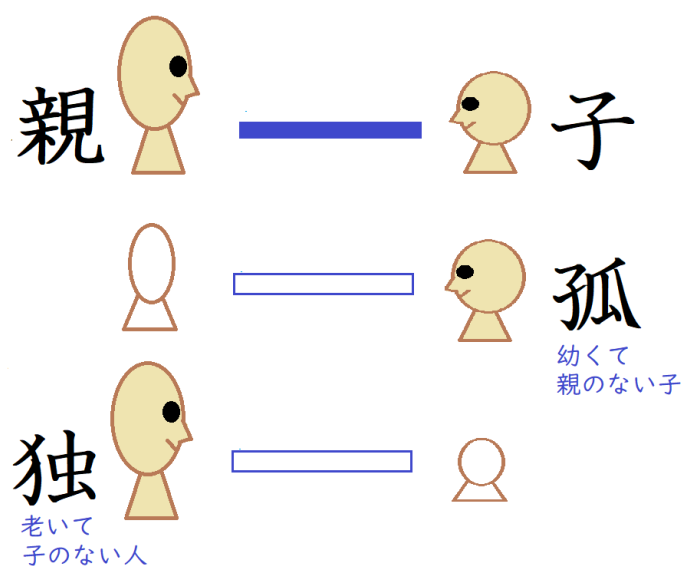
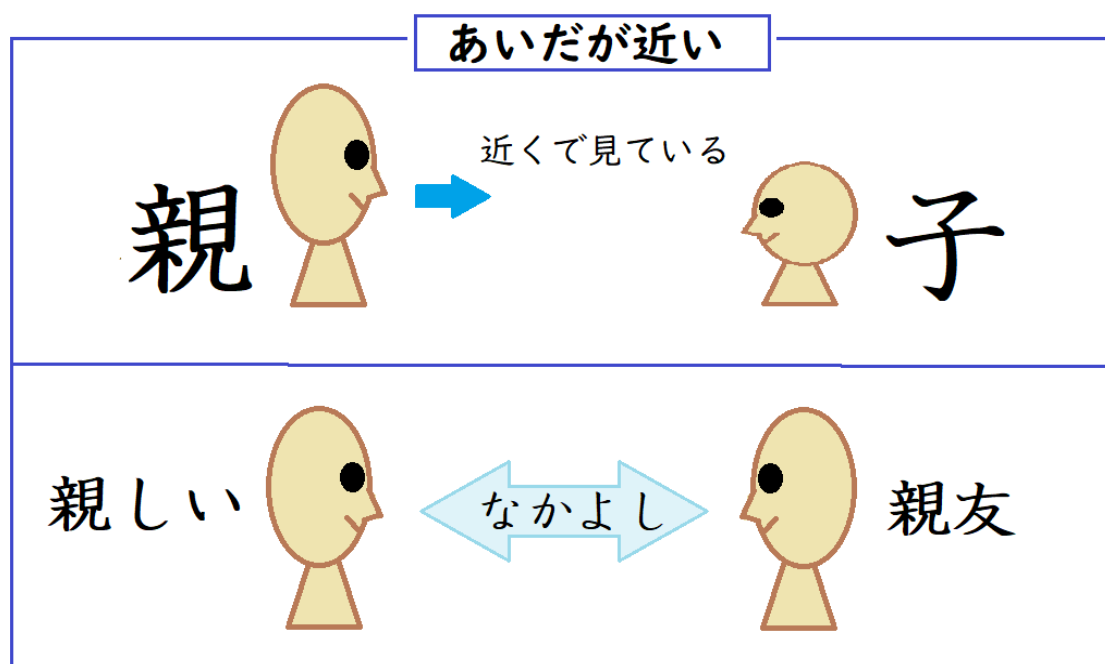
原義は、いまとなっては、わからない。

用例からは、《ちかい（ちかし）》→《あいだが近い》《近くで見ている》が全体をつらぬくこの字の基本的な意味ととらえられる。

基本義 と 派生義

青字：漢語。日：日本語用法。

- A 名詞 (1) 父母。**おや**。「**両親・親権・親子・母親・親孝行**」
 (2) **みうち**。親類。姻戚関係。「**親類・親族・肉親**」
 (3) **おや**。中心になるもの・中心になるひと「**親指・親会社**」
 (4) したしみ。したしみ信頼すること。信頼するひと。
- B 動詞 (1) したしむ。「**親愛なる・親切・親交・親和**」
 (2) **みずから**事をつかさどる。「**親告・親書・親展・親政・親授**」
- C 形容詞 (1) 血縁がもっとも近い。**ちかい**。「**近親**」
 (2) したしい。「**親疎・親密（きわめて親しい）・親友・親近**」
- D 副詞 (1) したしく。**みずから**。



「孤」は、親を失った子ども。

「独」は、子どものない老人。

老而無妻曰鰥。老而無夫曰寡。（妻を失った男，夫を失った女）、
老而無子曰獨。幼而無父曰孤。（老いて子のない人，親のない子）
此四者，天下之窮民而無告者。 『孟子』梁惠王篇下

「鰥寡孤独」[かんかこどく] 自分の苦しみを表現したり誰かに告げ訴えたり
することができない身寄りのない人。無告の民。



「親指」(第1指)は、最も太い指ということから、古くは「おおゆび」(おほゆび)と言われていた。近代になって「おやゆび」にかわっていく。同種のものうち、中心的役割を果たし、また、比較して大きいものということから「親」としていったようだ。

「小指」(第5指)は、最も小さい指ということから、「大指」に対して名づいたとみられる。「子指」でないところに注意。

教科書から

「だって、ぼくが、きみに
お手紙出したんだもの。」

「きみが」。

がまくんが言いました。

「お手紙に、なんて書いたの。」

かえるくんが言いました。

「ぼくは、こう書いたんだ。」

『親愛なるがまがえるくん。ぼくは、きみが

ぼくの親友であることを、うれしく思っています。

きみの親友、かえる。』

「ああ」。



『お手紙』

● 親友 ゆう ○ 親愛 しんあい

「なかまの言葉」

父
母
姊
弟
妹



親



兄



子

わたし



■「かぞく」を あらわす 言葉の
漢字を  から えらんで、 の
中に 書きましょう。